

# 校長室から

令和元年 1 1 月 2 5 日

## 被災地交流 神戸で考えた事

### 震災を経験した人間して 大切な事は何か

1 1 月 1 5 日(金)～1 7 日(日)の3日間、木下真理子教諭、門傳康弘教諭の引率で、本校の第2学年の男女8名の生徒が、神戸市を訪問しました。私は、団長として同行しました。

「神戸マラソン」のオープニングセレモニーで、神戸市の中学校と合同で復興と希望の歌「幸せ運べるように」を合唱してほしいとの依頼を受けてのものです。神戸市と宮城県の被災地交流事業の一環でもあり、毎年、宮城県内の学校がご招待を受けていて、去年は多賀城高校が神戸を訪問しました。

この事業は、阪神淡路大震災での被災の際、支援を受けた全国の方々に感謝の気持ちを伝え、同時に神戸の復興の様子を知ってもらおうと、「神戸マラソン」実行委員会が主催しているもので、神戸市教育委員会を通してご招待を受けました。

本校が推薦されたのは、「生徒会活動やボランティア活動、部活動が盛んで、長年、合唱に取り組んできた実績等を評価したものです。」とお話をいただき、大変光栄に感じながらの旅となりました。

8名の生徒達の大活躍で、神戸市や関係の方々から高い評価を受け、多くの方々の涙を誘い、感謝されて帰ってまいりました。生徒達の活躍の様子は、後日、詳しくご紹介いたします。

阪神淡路大震災から、すでに25年が経過しようとしていますが、生徒達はもちろん、私達も、被災からの復興のプロセスはよくは理解できていないのが現状です。神戸市も震災後、新たに生まれた方々、他から移住してきた市民の方々にとっては想像が出来ないものなのかもしれません。

しかし、神戸の方々の復興への思いは、十分伝わってきました。3日間私達のお世話をしてくれた神戸市役所の方々、神戸マラソン実行委員の皆さん、そして合唱のお世話をしてくれたスタッフの方々、訪問先の中学校の先生方、マスコミの方々。震災の話題が絶えません。「あの時は、〇〇のような状況でした。」「神戸全体が…。」「私の中学校では…。」「この地域は、壊滅的で…。」「この場所は実は、大きな被災を受けた場所で…」まだまだ風化していないと実感します。それどころか復興への思いは強いのだと感じます。

それとは逆に「まだあの時の事を思い出したくない人もいて…。」「心の中にしまっている人も多い…。」私の友人でもある神戸の中学校の校長先生も「まだ、あの時の事をじっくり考えようとしていない自分がある。怖くて、思い出したくない。」と話されていました。同じ年齢で仲良くさせていただいております、いつも、とても元気で快活な校長先生ですが、やはり震災の傷は大きいのだと感じました。それでも皆さん一人一人が様々な思いを抱きながら前を向いて歩んでいる事に、言葉では表現できない思いが湧き上がってきます。

神戸には震災直後に誕生した歌があります。「幸せ運べるように」という歌です。25年間の長きに渡って、神戸復興の象徴的な歌としてずっと歌い継がれています。東日本大震災の時には、仙台市の中学生が避難所で、この曲の「神戸」という詩の部分を「ふるさと」と置き換え、合唱した事も大きな話題となりました。本校の生徒達8名も、神戸の地下街で行ったストリートコンサートで歌わせていただきましたが、聴衆の皆さんも口ずさんで涙を流していました。きっと様々な思いが湧き上がってくるのでしょう。

裏面へ

逆に「あの時を思い出してしまうので、この曲はどうしても歌えないし、聴けない。」という方もいるそうです。多くの人々に大きな傷跡を残してしまう自然災害というのは、とても残酷です。しかしその逆境から、新たに生まれてくる光もあるのだと思います。その一つが「神戸マラソン」なのかもしれません。

8名の生徒と2名の教員との旅の最初は、「多くの学校から長町中が選ばれて名誉な事だなあ。」と誇りに感じながら飛行機に乗り込みましたが、次第に考えさせられる事が多くなり、生徒達の合唱のすばらしさだけではない、重い課題を背負ったような気持ちになりました。

「復興とは何か。」「神戸とは何か。そして被災した仙台とは何か。」私自身の気持ちがなかなか整理できないまま、仙台に戻りました。ちょうど時期を同じくして、東日本震災の事を取り上げた「小さな神たちの祭り」というテレビドラマが放送になり、ずっと見ていました。

物語は、震災で家族が行方不明になり、一人だけ生き残った亘理町のイチゴ農園の長男が主人公で「自分だけ幸せになっていいのだろうか」という罪悪感を抱えながら生き、やがて妻になる女性に励まされながら、不思議な体験をしつつ、立ち直っていくといものです。

その中で、何事もなかったかのように人々が行き交う華やかな仙台駅のデッキで「仙台は被災者に寄り添ってくれない。」と語る場面があります。やがて妻になる女性は「仙台が元気にならないと、東北全体が前へ進めないんだよ。」と励ましますが、なかなか心を開こうとしません。

私が今回見た神戸は、とても美しい街で、震災があった街とは思えませんでした。しかし、神戸のありとあらゆる人々が、自分自身も、そして神戸も元の姿に戻そうと必死に生きてきたのだと思います。仙台はどうなのだろう。「仙台は寄り添ってくれない。」という言葉に、ひっかかりを感じ、神戸で重い気持ちになったのは、この主人公の言葉に繋がるのかもしれないと感じました。私自身、震災で、父方の親戚をほとんど失っていたからかもしれません。

しかし、あの時、仙台市全体も、人の心も大きく傷つきました。皆が必死でした。寒い中、何時間も並んで水や食料を求めたり、ガソリンを買い求めて、ずっと車の列ができたり、そして人を吊ったり、神戸と同じように傷つきました。寒さに震える中並んで列を崩さない姿を見て、世界の人々からは「日本人はなんて道徳的なのか」と称賛を受けましたが、私達はそれどころではありませんでした。当事者の私達だけが、この地で何が起きているか理解できていませんでした。他の日本中の人々は生中継で私達の悲惨な状況を理解していました。この震災以後、苦しい思いをして、立ち直れていない方々も多くいると思います。しかし「仙台が元気にならないと、前に進めない。」事も確かな事で、それが現実であり、今も様々な意味で、震災は終わっていないのだと思います。

物語の終盤で、女性が「みんな、さようならも、ありがどうも言えずに逝っちゃったんだよね。きっと話したかった事、伝えたかった事いっぱいあったよね。」と涙ながらに男性に語りかけます。男性は、「でも、いつもそばにいると思うから、そんな事は、分かっていると言わないよな。」と答え、やがて少しずつ現実を受け入れていこうとします。

神戸で感じたのは、このようになかなか解決できない感情だったのかもしれないなと思いながら見ていました。「震災の風化は進んでいる」と一括りにされますが、きっと「風化が進んだ」のではなく、「前に進もう」としているのかもしれないなとも感じます。口には出さない苦しさを心に沈めて生活しているのかもしれませんが。結局、何も解決できない神戸の旅でしたが、とても有意義な3日間でもありました。そして、一つだけ確かに理解できた事があります。それには触れませんが、今回、宮城県の代表として参加してくれた生徒8名も、きっと深く考えてくれているでしょう。だからこそ、神戸の方々は、毎年、被災地である宮城県の児童生徒を招待してくれるのかもしれない。